

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

昭和初期における『老子』思想の研究について：  
津田左右吉と長谷川如是閑の『老子』の研究を中心  
として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Guo, Yongen メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1365">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1365</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 2. 博士論文審査の要旨

東洋で著された思想書の中で最も著名なものは中国の『老子』であろう。中国ではその注釈本の数は三百六十余あり、世界的に見ても1861年以降その欧文版は三百余あると言われる。中国以外の国で、その研究に最も精力的に取り組んできたのは日本である。とりわけ昭和初期(1925～1945年)における『老子』研究は、本国(中国)におけるそれより活況を呈し、目覚ましい成果をあげることになった。たとえば、武内義雄の校勘考学による『老子』原型の復元、また武内とともに『老子』研究の双璧と称される津田左右吉の批判的『老子』研究、そして在野のジャーナリスト長谷川如是閑による『老子』研究などがそれである。

『老子』についてはこれまで、その著者は一人か、それとも複数か、そもそも「老子」なる人物が実在したかどうか、また、孟子の前に成立したか、それともその後かといったような、その著者、成立年代については諸説紛々であった。そうした状況の中で、武内は言語学、とりわけ音韻論の観点からそれらの問題を解決しようと試みた。他方津田は、武内の試みをそれなりに評価しつつも、本質的な問題は言語に関わる

それではなくむしろ『老子』に述べられている思想に関わるそれであって、その根本思想を闡明すれば、その結果として成立年代（時期）や著者の問題にも自ずと解答が与えられるはずだと考えた。しかし、本論文著者郭永恩氏によれば、津田の『老子』思想研究がかれの仕事全体の中でどのような位置を占めるのかについてあまり顧みられてこなかった。そして長谷川も、『老子』についての本質的な問題はその思想自体であると考える点で津田と軌を一にしたが、かれの『老子』思想研究がきわめて重要な意味をもつことについては津田のそれ以上にほとんど顧みられることはなかったと郭氏は指摘する。

従来、日本への中国思想の影響としては孔子や孟子などの「儒学」のそれが指摘され、『老子』のそれはさほど注目されなかった。一時期、儒学の立場から、『老子』の思想は儒学のそれと一致するものであるなどという解釈さえなされたこともある。しかし、日本思想史の表舞台で絶えずその影響が注目されてきた儒教に対して、『老子』の思想はいわばその裏舞台で、あるいは地下水脈のごとくにその命脈を保ち続けてきたと言える。著者郭永恩氏は、津田、長谷川両碩学のそれぞれの『老子』思想研究に焦点を当て詳細に分析し、さらにそれらを比較検討してその類似点と相違点とを別出する。

『老子』には「無為自然」とか「無知無欲」といったことが説かれているゆえに、これまで、それは西洋にはない「無」の思想を根本とする東洋独自の深遠な形而上学的内容を含む思想書として見られることが多かった。しかし、津田と長谷川は、儒学が「支配者の立場に立つ思想」を説くのに対してそれが「庶民の立場に立つ思想」、「生活者の立場に立つ思想」、その意味でそれはむしろ「現実主義」を説く思想であると見て、従来の『老子』観を根本的に転換する。このように、『老子』思想は「現実主義」を主張するものと見る点では一致する両氏ではあるが、ただ、津田がそれは畢竟「利己主義」に帰着するものとみて徹底的に『老子』思想を批判することになったのに対して、長谷川は、『老子』の説く「村落自治体」という思想の重要性に着目して、それを基礎にした「大国家」の成立を目指すというのが『老子』の究極目的であると解して、それを高く評価する。

ところで、昭和初期（1925～1945年）といえば、ちょうど日本の中国侵略の時期と重なる。その時期になぜ津田と長谷川は中国の、しかもとくに『老子』の研究に精力的に取り組んだのか、著者郭氏はその点に切り込んでかれらの真意を確かめようとする。氏によれば、それは結局、当時日本社会に台頭し全体を覆いつつあった狂信的な民族主義（日本主義：Japanism）、軍国主義を批判し、庶民、生活者の視点に立って、その視点から日本の国家体制、そして日本文化の新たな創造を目指すというところにあった。以上が本論文の主旨であるが、これに対して本委員会は様々の観点から審査・点検を試みた。その要点は次の通りである。

- ①そもそも著者郭永恩氏自身の『老子』観はどのようなものか。それが明瞭に述べられているか。
- ②『老子』研究の現代的意義について。そのことが、いくらかでも述べられているか。
- ③中国では、政治思想を中心に説いた思想書として『老子』を見る研究はあったか。
- ④『老子』を形而上学的な思想を説いたものとする解釈への言及はあるか。  
それと津田、長谷川の『老子』解釈との比較はなされているか。
- ⑤武内義雄の『老子』観について、それが十分に考慮されているか。
- ⑥著者は本論文を基礎にしてどのような研究方向を目指しているか。

## 論文審査結果

① 著者郭氏自身の『老子』観は、次の通りである。『老子』の根本思想は、「無為自然」の「道」と「無知無欲」の「徳」であって、宇宙の理法と人間の道徳を示すものである。『老子』において、その「道」と「徳」が「無」と「有」をもって説かれている。その「無」と「有」について言えば、「無」は「有」を内含するという関係である。『老子』の「無為」は「有為」を内包し、その「無知」は「有知」を肯定するような「無知」である。『老子』においては、「道」・「徳」に到達する手段として「復」が提示されている。「復」とは人間の本源に立ち返ることを意味する。世間の平和と安定を希求するのが『老子』の追求する究極的目標である。著者はこのように、『老子』を「無」の思想を説く形而上学書としてではなく、現実主義に立脚した書と見ようとする。著者の『老子』観は、津田、長谷川の『老子』思想解釈、とくに長谷川のそれに通じるところをもつと言える。

②～④ なぜ現代において津田と長谷川の『老子』思想研究なのか。著者によれば、津田と長谷川による『老子』研究の特徴は、徹底的に形而上学的解釈を避け、それを現実的・政治的次元の思想を根本とし、「生活者の思想」「庶民文化」の重要性を説くものとして捉えたところにあった。このような『老子』解釈は津田、長谷川以前には本国の中国にも見られなかった独自のものであり、現代日本や中国のみならず、世界が目指すべき在り方に示唆を与えるという。この解釈にしたがうなら、『老子』の思想の中には自然破壊の問題に直面する現代にも示唆を与えるものがあるという。『老子』が現実主義を説くものと見る津田、長谷川の解釈を取り上げ、それらを詳細に比較検討した著者の意図は明瞭である。ただ、本論文は、いきおい『老子』の中に「現実主義」を読み取る両氏の解釈に焦点を絞った論述になっているため、論旨はきわめて明快であるが、他方で、それと『老子』を「無」の思想を説く形而上学書と解する見解との比較検討については今後の課題として残されている。

⑤ 武内義雄が校勘考学によって『老子』原型の復元を果たした点への言及はなされているが、それ以上に、武内の『老子』思想の解釈、とくにそれと儒学との関係についてのかれの見解について、少しでも触れる必要があったらう。

⑥ 著者の研究の目指す方向もはっきりしている。津田、長谷川の『老子』研究を、当時のより広い歴史的・社会的・文化的背景の中で再検討し、両氏の老子論、さらには中国思想論、日本文化論研究を一層深め、現代社会が直面する問題への処方箋を提示しようとする方向である。

以上、今後補われるべき、あるいは展開されるべき点がいくつかあり、また論述にやや繰り返しが多く、論文構成にも多少の疑義があるものの、先行する中国語文献はもとより、膨大な日本語文献を渉猟しつつ、とくに、津田のそれとともに長谷川の『老子』研究がもつ重要な意義を新たに発掘し、その中に現代社会が目指すべき方向を見ようと試みた郭氏の業績には高い評価が与えられるべきである。

また、本論文の意義をより広い視野で見たとき、それは、明治期から大正期にかけてなされ、昭和期に入って未曾有の展開を遂げた日本における「中国学」のさらなる進展にとって、さらには、1990年代から形成されつつあった中国における「日本学」の進展にとっても画期的な里程碑になるだろうし、そうして日中両国の文化交流、相互理解にとってもまた重要な寄与をなす成果として位置づけることができる。

なお、最後に取えて触れておきたいのは、とくに津田がその論考や日記で、かれと同時代の日本人でさえ見るに耐えないことば（たとえば「糞」）を喩えとして使って中国人、中国思想を蔑視、批判するにもかかわらず、郭氏が終始一貫して冷静に津田の論考を分析しながら、かれの意図を粘り強く剔出しようとし、独自の成果を出したという点である。

本審査委員会は郭永恩氏の論文に以上の評価を与え、それを博士論文に十分に価するものとする結論に到った。

## 最終試験結果

[試験実施 2012年2月4日(土)]

最終認定試験は、午後2時から4時にかけて本学「三木記念会館」にて公開試問形式で行われた。

3名の学内審査委員（教授：小浜善信 [主査]、教授：山川英彦、教授：丹生谷貴志）と1名の学外審査委員（奈良教育大学准教授：橋本昭典）の、計4名によって行われた。

著者郭永恩氏による約30分間のプレゼンテーションの後、直ちに審査委員との活発な質疑応答が行われた。各審査委員からはきわめて厳しい質疑が多く出されたが、いずれの質疑に対しても郭氏からは流暢な日本語による明快な回答を得られた。上に指摘された、今後の課題とすべき点はあるにしても、それはむしろ本論文の審査に関わった学内・学外委員全員の、著者の今後の研究に対する期待の表明といってよい。

以上のような最終認定試験結果を踏まえて、委員全員が申請者郭永恩氏に対し博士の学位を授与することに合意した。

以上